

発行：弘大病院広報委員会
(委員長：鈴木唯司病院長)

〒036-8563 弘前市本町53
弘前大学医学部附属病院
TEL0172-33-5111 (代表) FAX0172-39-5189

弘大病院広報

南塘だより

第33号

(創刊：1994年12月15日)

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言「退官にあたって」



弘前大学医学部
附属病院長
鈴木 唯司

平成13年4月から3年間附属病院長を務めさせていただきました。この間自分の附属病院に対する知識の乏しさ、統率力の不足を身をもって実感して参りました。特に独立法人化に向かって附属病院がどのような問題を持っているか知ってはいませんが、それに対してどのように対処するかのポリシーが充分だったか今さらながら反省しています。それでも、ここまでまとめてこれたのは病院に関わる全ての皆様の御協力と感謝しております。私が就任した時、立てた目標は前任の原田先生との引き継ぎを含めて、リスクマネジメントによる医療事故の防止、義務化に備えた卒後臨床研修の早期立ち上げ、それに外来棟の早期新築でありました。リスクマネジメントの意識は、特にゼネラルリスクマネージャー砂田看

護師長のすばらしい働きで向上致しました。卒後臨床研修は新川卒後臨床研修センター長、大沢副センター長と長尾事務官の努力によりスムーズに実施できることになりました。残念ながら大学病院での研修医師は目標の半分を超えた程度ですが、県内の数病院で新しく研修が開始されることになったのは彼らの努力も大きかったと思っています。また、外来棟の新築がやっと本決まりになりました。窓の外では旧中央診療棟の取り壊しもやっと終わりに近付き、巨大なブルドーザーが4台、最後の後片付けに入っています。16年には杭打ちが始まるでしょう。この後早く臨床研究棟の新築が待たれます。とここまで順調でしたが、最後にのしかかってきたのが病院経営の甘さでした。奥村病院長補佐が中心になり診療される皆様へ無理を承知で節約をお願いし、事務の方々に物流一元化の促進をお願いする等少しずつ目途はついてきましたが、病院経営の困難さは根本的には解決されず、次期院長に引き継ぎがざるを得ません。毎年24億近い借金返済が肩に重くのしかかります。次期院長のイニシアチブの元、皆様の御活躍を祈っております。

診療科の紹介【泌尿器科】

泌尿器科は、腎臓、尿管、膀胱などの尿路の他に、精巣、前立腺などの男子生殖器を主に扱っている。

最近、新患者数の増加が著しく、本県における前立腺癌検診が2003年4月から本格的に施行されており、前立腺特異抗原(PSA)のスクリーニングにて異常を指摘された患者が二次検診、即ち前立腺生検目的で当科に紹介される例が増加した事が影響している。

これに伴い早期(限局性)前立腺癌の発見率が向上し、根治的の前立腺摘除術の施行症例が増加の一途を辿っている。

今後も益々、増加が予想されており、手術療法に加え、最近脚光を浴びているBrachytherapy(前立腺小線源治療)が、保存的治療のオプションとして放射線科との連携の下に施行準備が漸次、整いつつあり期待される。

手術症例では、この他、画像診断の進歩により発見率が増加してきた早期(小径)腎癌に対する腎部分切除術に代表される腎機能温存手術も積極的に施行しており、最近ではより低侵襲の腹腔鏡下腎摘除術の施行例も増加しつつある。

表在性膀胱癌に対するBCG注入療法は教室では国内でも最も早期に取り組み、その優れた再発予防効果は現在では広く認められている。

一方、浸潤性膀胱癌の標準的治療法は、根治的膀胱全摘除術であり、全摘術後の尿路変更法として一貫して推奨してきた自然排尿型代用膀胱である回腸利用膀胱再建術が患者さんのQOLも高く症例数が漸増しつつある。

その他、副腎疾患に対する腹腔鏡下副腎摘除術、尿路結石症に対する経皮的腎切石術(PNL)、経尿道的尿管切石術(TUL)および、体外衝撃波による結石破砕(ESWL)の施行件数も増加してきている。最近、男性不妊症に対し、産婦人科の協力のもとに精巣内精子採取術(TESE)を施行する症例が増加しており、外来受診患者数も増加傾向にあ



る。また、腎不全に対する血液透析治療や小児に対するCAPD療法を積極的に推進する一方、腎移植の啓発、啓蒙にも努力しており、着実に成果が上がりつつある。

以上、最近の泌尿器科を取り巻く話題を中心に紹介してきたが、今後も「患者さんに優しい医療」を求めて、他の診療科との連携の下、国内外の先進的な臨床技術を導入し、地域医療への貢献はもちろんだら、青森から世界に向けて発信できるような治療法の確立を目指し、切磋琢磨して頑張っていきたいと思っております。

(泌尿器科)

次期病院長候補者に 棟方昭博教授選出



内科学第一講座
棟方 昭博教授

鈴木病院長の任期満了に伴う次期病院長候補者本選挙が2月19日の医学部教授会で行われ、次期病院長候補者として、医学科内科学第一講座棟方昭博教授が選出された。任期は平成16年4月1日から2年間。

新任科長の自己紹介



脳神経外科長
大熊 洋揮

弘前大学を昭和58年に卒業し、爾来、20年間、青森県内の病院で脳外科医として働いてきました。殊にこの6年間は大学病院で継続して仕事をさせて頂いてきましたので、当院の多くの職員の方々と顔馴染みであり、あらためての自己紹介は不要にも思われます。そこで一つ二つ思いついたことを書かせて頂きます。

20年の歳月を一つの県内で医療に従事することは、ありそうで、実際はそう多くの方が経験することでは無いように思われます。従って、この間、青森県の医療の幾多の変容を目の当たりにすることが出来ましたが、歳月が経ても「変わらないこと」もいくつかはありました。相も変わらぬことの一つは慢性的な医師不足であり、脳外科もその端的な一例です。一方、変わらない有り難き一面は「ここ」です。当地の医療従事者の精神的レベル、つまり医療および患者に対する誠意が他地域に比べ遙かに優ることは、関東出身の私には身に沁みて感じる事が出来ます。

現在、大学病院では様々な課題が待ち受けており、脳外科のなすべき事も、地域および救急医療の中核としての役割や高度医療の推進など多々あります。その基盤はそれを実行する人員の充足に尽きますが、人は群れたいという心理があるが故に都会が形成されるとすると、この地の人員不足が一朝一夕に解決されることはないかも知れません。しかし、「ここ」あれば人的充足はいずれ必ず成し遂げられるものと確信もしております。それまでのしばしの間、志ある仲間と苦業を共にすることを喜びとし、弘前大学附属病院とその脳神経外科の将来をその変わらぬ「ここ」に託したいと考えています。

新任部長の自己紹介「ご挨拶」



総合診療部長
加藤 博之

はじめまして。本年2月1日付で弘前大学医学部附属病院総合診療部長に就任致しました。加藤博之と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。私は北海道で生まれ、神奈川県で育ちました。昭和59年に佐賀医科大学を卒業後同大学の内科に入局し、主に一般内科学と老年医学を勉強致しました。平成9年からは同大学に新設された救急医学講座に移り、1次-3次の全ての重症度の救急患者が来院する救急部(いわゆる北米型ER)で診療に携わって参りました。その間、医学生に対する臨床入門、総合外来・救急外来実習などの卒前教育や研修医に対する卒後教育にも従事してきました。今回、光栄にも本学総合診療部の初代部長を拝命し、責任の重さを痛感し身の引き締まる思いです。大学附属病院における総合診療部のあるべき姿は、現在必ずしも全国的にコンセンサスを得られたものがあるわけではありませんが、目前に迫った卒後臨床研修の必修化を初めとして、プライマリ・ケアの教育に大きな役割を期待されている

先憂後楽

安全推進実地視察を終えて



手術部副部長
坂井 哲博

高坂公博、砂田弘子、藤田祥子、山本葉子各技官とチームを組み平成15年12月8日から11日間にわたりテキサス大学パークランド記念病院、ニューヨーク医科大学バルハラメディカルセンターの2施設での安全推進体制を実地視察してきました。このような機会を与えていただきました病院長をはじめ全職員の皆様に深謝申し上げます。今後調査結果を報告会や研修会を通して弘前大学医学部附属病院に還元していきたいと思っております。

米国では、頻発する医療事故訴訟に対して、医療行為のスタンダードを明確に定めて情報開示を積極的にすすめることで対処しています。

1. 学会あるいは州単位で定期的に改定されるしっかりとした「医療行為のスタンダード」が存在すること。
2. リスクマネジメントの専門職員を十数人配置して合併症発生を客観的に分析して情報開示するシステムが存在すること。が前提となっています。「スタンダード」の意味するものは重大であり、ガイドラインとは根本的に異なるものです。われわれの周りには「マニュアル」も再考する必要があるかもしれません。

ところで、「安全な医療」という言葉をよく耳にします。患者さんが「安全」と聞くと事故がないのが当たり前と誤解され易いとお思いになりませんか? 「医療事故をなくすには医療行為をしないこと」と極言されるように医療行為は決して「安全」ではありません。米国では「医療行為はriskyなのだから患者と自ら双方にdefensiveに行う。」と言います。ここでのdefensiveは「萎縮医療」とは正反対の「積極的な意味でのdefensive」です。前述した2条件がしっかりとされているからこそリスクを伴う先進的侵襲的治療に対しても積極的に挑戦できます。多くの文献でも日本語には「安全な」としか訳しようのない「defensive」がよく見られます。

点滴をする。薬を投与する。患者が治療を開始すると同時に、起こりうる合併症の種類と可能性は増加します。なかには命にかかわるものも少なくありません。だからと言って「危険な」とも表現できず.....

「defensive」に相当する適切な日本語をどなたかお教え願えないでしょうか?

のは明らかであります。この点でこれまでの私の経歴が少しでもお役に立てばと思っております。

今後、学内の先生方はもちろんのこと、県内外の臨床研修病院の先生方、卒前卒後教育に携わる診療施設の先生方、医師会の先生方のご指導を仰ぎながら、弘前大学と地域のために貢献して参りたいと存じます。何分不慣れなために今後不向き届きの点多々あるかと存じますが、どうか皆様のご指導、ご鞭撻のほど卒前卒後教育に携わる診療施設の先生方、医師会の先生方のご指導を仰ぎながら、弘前大学と地域のために貢献して参りたいと存じます。何分不慣れなために今後不向き届きの点多々あるかと存じますが、どうか皆様のご指導、ご鞭撻のほど卒前卒後教育に携わる診療施設の先生方、医師会の先生方のご指導を仰ぎながら、弘前大学と地域のために貢献して参りたいと存じます。

平成15年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

第6回附属病院診療奨励賞授賞式が、医学部学術賞及び医学部医学科国際化教育奨励賞授賞式と共に、2月13日(金)に医学部コミュニケーションセンターにおいて執り行われ、受賞者に鈴木病院長から本賞の楯と副賞として財団法人弘仁会から奨学寄附金が贈呈されました。今年度は診療技術賞としてISOの取得により本院のマネジメント改革に貢献した薬剤部(代表 藤田祥子)の「国立大学病院薬剤部としてのISO9001:2000

の認証取得」、低侵襲診断法及び手術法を開発した欠畑誠治講師(耳鼻咽喉科)の「内視鏡をもちいた伝音難聴の新しい診断法と手術法の開発—経鼓膜の内視鏡下鼓室形成術—」及び褥瘡発生を減少させ入院環境の改善に貢献した褥瘡対策チーム(代表 水木大介)の「褥瘡対策チームの活動—褥瘡発生減少への貢献—」の3主題が受賞しました。授賞式に引き続き、祝賀会が同センターにて和やかに行われました。(総務課)



国立大学病院薬剤部としての ISO9001:2000の認証取得

- | | |
|-------------|---|
| 薬剤部 | 藤田 祥子, 大泉 昭良, 野呂 秀紀, 下山 律子, 宇野 司, 工藤 正純, 福士 涼子, 新岡 文典, 金澤佐知子, 村田 佳子, 佐藤 淳也, 小原 信一, 相内 玲子, 目時三保子, 盛 純子, 三上 礼子, 葛西美保子, 細井 一広, 関口 徳志, 岡村 祐嗣, 葛西 公子 |
| 事務部 | 工藤 泰民 |
| 看護部 | 砂田 弘子 |
| ◎診療技術賞を受賞して | 代表 薬剤部 藤田祥子 |

この度は診療技術賞を頂き、誠に有難うございます。昨年1年間、薬剤部の全職員がひとつになって取り組んだ活動に対して、このような評価を頂きましたことを一同大変喜んでおります。

薬剤部が承認をめざしたISO9001:2000はスイスのジュネーブに本部を置き、国際的に適用する標準や規格を制定する国際機関であるISO(国際標準化機構: International Organization for Standardization)が1987年に制定した品質マネジメントシステム(Quality Management System: QMS)に関する国際標準規格で、「物」に対する規格ではなく、顧客満足を実現するための「管理の仕組み」に対する規格です。ISO9001:2000の承認は「組織が、顧客に満足を与える一定のレベルのサービスを提供する仕組み・能力をもっていることを保証するもの」で、QMS構築・実行・改善を繰り返して、9ヶ月の取り組みを経て、昨年3月に国立大学病院薬剤部単独としては初めて取得しました。

ISO承認は薬剤部の現状を明らかにし、その現状をスタートに患者を意識した活動を進め、最終的には最良の薬剤部を目指すという当薬剤部の意気込みを示したものであります。今後も薬剤業務の質保証および患者が強く要望している医療の安全確保のためにISOの概念をうまく活用したいと思っております。

内視鏡をもちいた伝音難聴の新しい診断法と手術法の開発 —経鼓膜の内視鏡下鼓室形成術—

◎診療技術奨励賞を受賞して 耳鼻咽喉科 欠畑 誠治
今回は診療技術奨励賞をいただきありがとうございます。

大学病院は診療・研究・教育という三つの柱からなりたっていますが、独立法人化を間近に控えて診療への比重が高まってきています。一方、患者様の医療に対するニーズも高まっており、より低侵襲な検査・手術、入院期間の短縮が望ま

れています。

鼓膜の奥には、耳小骨と呼ばれる音を伝えるための三つの小さな骨があります。その耳小骨の連鎖が生まれつき、または外傷などにより離断しているために難聴を患っている患者さんがいます。鼓膜の奥の骨に囲まれた場所にあるため、高分解能CTや種々の聴覚検査によっても確定診断はつかず、顕微鏡下に行う試験的鼓室開放術という手術が必要でした。

そこで今回、受賞の対象となった外来でできる内視鏡による診断法を開発しました。これは、最近注目を集めているレーザー鼓膜開窓術の長所を最大限に取り入れた方法です。細径の内視鏡を組み合わせることにより、安静を保ちにくい小児にも外来で適応可能な低侵襲検査手技です。さらにこの検査によって耳小骨離断と確定診断のついた患者さんに対して、レーザー鼓膜開窓部から内視鏡下に耳小骨連鎖再建を行う経鼓膜の鼓室形成術(Endoscopic Transtympanic Tympanoplasty: ETT)を開発しました。これまでの試験的鼓室開放術に必要な皮膚切開、外耳道皮膚の剥離や後壁の骨の削開が不要な低侵襲手術で、入院期間の短縮が可能です。これからの耳手術の基本術式の一つになりうると考えています。

さらに患者様にやさしい医療の発展に少しでも貢献できればと思っております。

褥瘡対策チームの活動 —褥瘡発生減少への貢献—

- | | |
|-----|-----------------------------|
| 皮膚科 | 水木 大介, 金子 高英 |
| 看護部 | 久保田昭子, 大和田優子, 田中 靖子, 小山内ひさ子 |

附属病院診療奨励賞に選定していただき、まことにありがとうございます。褥瘡対策チームを代表して心より感謝申し上げます。

さて2002年10月に褥瘡対策未実施減算が設定に伴い、褥瘡対策チームが立ち上がってはや1年が過ぎました。当初は手探りしながらのスタートでしたが、少しずつ形をなしてきて感があります。もともとは診療点数減点を防止し、いわば受動的かつ病院運営を主眼としたものと取られがちな褥瘡対策チームですが(私自身も当初、そう感じていました)、この活動をポジティブにしていかなければいけません。つまり、この活動を続けていくことによって、各科の医師・看護師のみなさんとの交流の機会が増え、お互いの褥瘡への理解を深めることができる。そうすることによって院内の褥瘡の診断や治療方針のシンプルなシステム化を構築していかなければいけません。それが最終的には入院患者さんの苦痛を取り除き、または早期退院を促すことになるでしょう。地道な活動ではありますが、上記の様なことを目標にし、努力していきたいと思っております。本活動は各科のスタッフの皆様の御助力なしに立脚しないものでありますので、今後ともご支援くださいますようお願い申し上げます。

病院情報管理システムの稼働について

医療情報部 羽田 隆吉

平成16年1月1日より、更新(6次)された医療情報システム、弘前大学医学部附属病院「病院情報管理システム」が稼働を開始しました。病院教職員の皆様のご尽力に敬意を表します。

国立大学病院の医療情報システムが「病院情報管理システム」と呼ばれるようになったのは、平成14年2月全国国立大学医学部附属病院長会議より「病院情報管理システム」の仕様書(案)(所謂共通仕様書)が提示され、平成15年1月以降に更新予定の大学から共通仕様書に沿う形で医療情報システムを構築しシステムの標準化を図るという方向性が示されたことによります。共通仕様書の内容は、診療情報の開示や診療リスク回避対策も含めた「良質の医療の提供」に資する情報業務を行うものであること、大学の法人化を前提にした経営管理手法の確立に

資するものであること、病院運営管理に係る意思決定に必要な情報の提供に資するものであること等となっており、極めて詳細かつ具体的な仕様(案)の提示がなされています。弘大病院の医療情報システムもこれに沿う形で仕様策定が行われました。また仕様のシステム(ソフト)への具体化は教職員から成るワーキンググループの尽力によりました。

1月1日よりオーダリングシステムの稼働が開始されましたが、フルオーダの実施を目指しております。また、これに引き続き、診療リスク回避に関連するシステム、物流に関連するシステム、管理会計システム、電子クリニカルパスシステム、看護過程支援システム、電子診療録システム(機能)を順次稼働させることとなりますので、病院教職員皆様のご協力を心よりお願いする次第であります。

第8回病院ボランティア懇談会の開催 ~鈴木病院長,長期活動ボランティアを表彰、意見交換を行う~

病院ボランティア懇談会は、患者サービスの一層の向上を図るため、本院で活動しているボランティア活動員から意見、要望などを聴くとともに、本院関係者との意見交換を行う場として開催されてきました。8回目となる今回の懇談会は、1月15日(木)午後1時30分から附属病院大会議室でボランティア活動員10人と鈴木附属病院長、花田診療環境向上推進委員長、須藤看護部長ら病院関係者8人が出席して開かれました。

初めに、病院長から「皆様の日頃のボ

ランティア活動に感謝と敬意を表します」とのボランティア活動員への感謝のことが述べられました。

引き続き、ボランティア活動員表彰要項に基づく表彰状の贈呈式が行われ、今回は、通算活動時間が500時間を超えた相馬友子さんへ表彰状と記念品が贈られました。また、都合で欠席されましたが、渡辺恵子さんが1,000時間、同じく高杉淑子さんが500時間を超え、表彰を受けられました。

懇談会では、ボランティア活動員の皆さんから、院内「げんき図書館」の運営、窓口職員の接遇、ボランティア活動のあり方などについて、さまざまな意見、要望などが出され、活発な意見交換が行われました。

最後に、病院長から「今後も、皆様からの貴重なご意見を生かしながら、よりよい病院運営を目指して力を尽くしますので、ご協力願いたい」とのあいさつがあり、閉会しました。(医事課)



院内コンサート開催

~12月クリスマスコンサート、2月弘前大学スティールパン部コンサート~

本院が患者サービスの一環として実施している院内コンサートが昨年暮れとこの2月の2回、外来待合いホールで開催されました。

年末恒例のクリスマスコンサートは、12月19日(金)18時45分から医学部創立50周年記念アンサンブルと弘前大学医学部管弦楽団とのジョイントコンサート。

今回は、コレルリ『クリスマス協奏曲』、バッハ『チェンバロ協奏曲へ短調』に続いてクリスマスメドレーとして『聖夜』『ジングルベル』などの演奏。また、客員出演された島口和子さん(弘前バッハアンサンブル)のチェンバロ独奏の心地よい音色も大変に素晴らしく、会場ホールに飾られたクリスマスツリーと相俟ってクリスマススムード一色の楽しいひとときでした。

また、弘前大学スティールパン部によるコンサートは2月5日(木)18時45分開演。スティールパンはドラム缶を加工したアコースティック楽器。南米カリブ海に浮かぶトリニダードトバゴの生まれ。メロディーも奏でる。日本では、まだこの楽器の制作者、演奏家とも非常に少なく、その中で弘大スティールパン

部は、楽器の数も腕前も大学としては全国一とのこと。

会場の皆さんは、お馴染みの「千と千尋の神隠し」から『いつも何度でも』、山口百恵『いい日旅立ち』など、心に染みる美しい「癒し」の調べに聴き入っていました。また、コンサート終了後には、スティールパン部の好意で、この珍しい楽器に実際に触れたり、叩いて音を出したりさせてもらい、しばらくの間あちこちで歓声が上がっていました。

今回のコンサートは、4月の開催を予定しています。

なお、このたびの2回のコンサート開催に当たっては、財団法人弘仁会から財政的な支援をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。(医事課)



【編集後記】

平成15年度最後の「南塘だより」第33号をお届けします。寄稿して頂いた職員の皆様にご心からお礼申し上げます。今回は3年間病院長としての重責を全うされた鈴木先生の退任の挨拶が掲載されております。また病院長は病院広報委員会委員長も兼ねておられ、本紙の内容充実には常に腐心して来られました。心から感謝申し上げます。

さて、4月からはよいよ法人化がスタートします。国立大学法人弘前大学

の諸規則等が国家公務員法と大きく異なるため、われわれ職員にとって戸惑うことが多いかと思えます。しかし大事なことは単に与えられたものとして受け入れるのではなく、それをどのように生かしていくかだと思います。そのためには、まず全職員が目的意識を共有することが大切ではないでしょうか。

4月1日から新病院長の下に、更なる患者サービスの向上と効率的な病院運営ならびに一層の経営改善を期待しております。

(弘大病院広報委員 棟方 博文)